

法王の恩赦

既報の通り (vol.13 No.8 参照) 現ローマ法王の執事であったパオロ・ガブリエレは、ヴァチカンの中の「カラス」として、昨年5月25日に逮捕され、ヴァチカンの牢屋に入っていた。10月6日には裁判によって、18カ月の実刑が言い渡され、引き続き牢にいた。その後自宅監禁となり、ヴァチカン市内の自宅に起居していたが、安全性を鑑みて、10月25日再度入牢となった。

事件に非常に頭を悩めていたローマ法王は、12月22日にガブリエレと12分程話し合い、彼を赦免した。これは人間の決定ではなく、神の決定だという。ガブリエレはヴァチカン市国を出なければならないが、仕事は与えられ、家族にも家が与えられる。

法王ツイッターを習う

現法王は昨年12月12日、アメリカのフィラデルフィアにあるヴィッラノヴァ大学で学ぶ最終学年のミカ・ラブ嬢とアンデリュウ・ジャディック氏をヴァチカンのパオロ6世謁見ホールに招き、ツイッターのやり方を教わった。そして、午前11時7分に世界に向け、メッセージを発信した。そのメッセージは「親しき友よ、ツイッターを通して諸君と一緒にすることは喜ばしいことだ。君たちの素晴らしい返事を待っている。心から君たちを祝福する」というものだった。最初は英語で送られ、続いてイタリア語、さらにスペイン語、ポルトガル語、ドイツ語、ポーランド語、フランス語、アラビア語で送られた。この呼びかけに150万人が呼応した。このようにITを使った呼びかけは、今を去る82年前の1931年2月12日16時49分に法王ピオ11世が、ヴァチカン放送局開局に際し、ラジオで全世界へ呼びかけたことに匹敵する出来事だ。そのツイッター発信後、多くの信者から多くの問いが寄せられた。そして法王は信仰に関して、3つの要素を含んだ返事を出している。それらは、1) 祈りの時にキリストと対話すること、2) 聖書に語られるキリストの言葉を聞くこと、3) 君が必要とする人の中にいるキリストに出会うことだ。

ヴァチカンの支持政党

一昨年11月ベルルスコーニを中心とした中道右派政権が倒れ、政党にとらわれない技術者内閣として生涯上院議員のマリオ・モンティ氏がイタリアの大統領ナポリターノから指名され、首相の座につき、13カ月間首相として、財政的に行き詰まったイタリア経済再生のために働いた。閣僚はほとんど政党に関係なく、それぞれの分野でエキスパートといわれる人が呼ばれ内閣を構成した。なかには、聖エジディオ共同体の創始者のアンドレア・リッカルディ氏が国際関係大臣として入閣し活躍していた。この暫定的内閣は、イタリアも財政的に落ち着きを取り戻し、経済再生への動きが軌道に乗ったということで、昨年12月末に総辞職した。イタリア再生のために道すじをつけたモンティ氏は国民的に人気を博した。もちろんモンティ氏の経済政策に反対していた政党もあるが、大統領がバックアップする彼は強かった。モンティ氏は、本年2月24日～25日に行われる総選挙に首相候補として立候

補することを宣言した。これは自分の作った政策が忠実に実行されるかを見極めるためでもある。彼は敬虔なカソリックの信者だ。首相になってからのヴァチカン訪問もローマ法王との謁見も大きく報道された。そのような関係から、ヴァチカンとしては、公式には支援を発表していないが、「イタリア司教会儀」は、議長でジェノヴァの大司教のアンジェロ・バニャスコの口を通して、次期選挙にはモンティを支持するとはっきり表明した。カソリックの司教達が作る新聞『AVVENIRE』の主幹マルコ・タルクイニの確信的な声明を記そう。

問) 教会はモンティ氏と共にいるのか?

答) 教会はイタリアと共にある。教会は人々と共に、つまり、司祭も男も女も一つの問題として、困難を伴うが真の人間の養成を心掛けている。イタリアはカソリックの人が多く、なかには政治を志す人も多く、その一人がモンティということだ。私もイタリア人の一人だ。モンティを支持する。彼はイタリアに関しても、ヨーロッパに関する問題でもしつかりヴィジョンをもっている。彼は信頼出来る人間だ。

子供たちのサンタクロースへの手紙

毎年クリスマスの近づく頃、子供たちはサンタクロースからなにかもらえると非常に楽しみにしている。そしてサンタクロースに手紙を書き、いろいろな願いをする。昨年、クリスマス前に、イタリアの7歳から9歳の子供たちがサンタクロースに手紙を書いた。その中で女の子の希望の品はバービーといわれる人形、男の子は積み木細工に似ているレゴが多かった。なかには、時代を反映してか、iPadの希望者は全体の30%に達した。おもちゃなどを希望した子供が多かったけれど、4人に1人は世界に愛が満ちることを願ったし、5人に1人は戦争の終焉と飢餓の根絶を願っている。また、家庭内にあっては、親夫婦が喧嘩をしないで仲良くして欲しいこと、また親子の間に何かよくないことが生じた時には速やかに仲介して欲しいとの要望もあった。

キリスト教徒の悲劇

宗教研究者で社会学者のマッシモ・イントロヴィンニ氏は、ある講演会で次のように述べている。「昨年2012年、キリスト教徒ということで、10万5千人が殺されている。つまり、毎日300人ぐらいの割合で殺されている」。一番危ない所は世界に3カ所あるという。1番目は北朝鮮のような全体主義国家、2番目にはインドのような民族的ナショナリズムの強い国、3番目に、マリからパキスタンへ続くが、イスラム過激主義の国だ。つまり、アフリカ、アジアが危険度の高い地域である。

ヴァチカンは「宗教の自由」を厳正な目で見ている。上記の3つの地区では、その状態が怪しい。それゆえに法王はよく「宗教の自由」を訴えている。

カソリック教徒が一番危険な所は、昨年の例から見ると、アフリカのナイジェリアだ。昨年暮れのクリスマスにも多くの殉教者が出ている。

(14頁へ続く)

現代社会と信教の自由・公開講座参加

深谷忠一

2012年11月30日、新日本宗教団体連合会主催の「第1回現代社会と信教の自由公開講座 憲法施行から65年―激動の現代社会と信教の自由」が東京の國學院大学で開催され、深谷の他に本教から天理やまと文化会議議長の白木原嘉彦氏、委員の上田禮子氏が参加した。

講座では岩下義治委員長のあいさつの後、京都大学大学院教授の大石眞氏が「憲法と信教の自由―憲法施行65年後の課題と展望」と題して基調発題を行った。続いて、玉光神社権宮司で信教委員会副委員長の本山一博氏がコーディネーターを務めてパネルディスカッションが行われ、その中で、石井研士國學院大学教授、平野武龍谷大学名誉教授、そしてフォトジャーナリストの藤田庄市氏がそれぞれに発題した。

コメンテーターには島蘭進東京大学大学院教授が各発題を踏まえて、公共空間での宗教の働きや責任を自覚した信教の自由の発揮について発言した。さらに、政治と宗教の関係やオウム真理教の問題など、信教の自由に関してのさまざまな問題が提起された。

(8頁からの続き)

「市民のみなさんに。

9月30日から10月2日までの3日間、北海道から沖縄まで全国の車いすの仲間と市民が集い、重度障害者の抱える多くの問題について真剣に話し合いました。たとえ寝たきりの仲間でも、ひとりの市民としてゆたかで生きがいのある生活をおくることができる社会こそ“福祉のまち”です。この福祉のまちづくりは、わたしたちに課せられた使命であり、すべての市民にとって早急に実現しなければならない課題であることを確認しました。

わたしたちも市民のひとりとして、みなさんの仲間として、みなさんの強い協力と理解のもとに、心ゆたかな“福祉のまち”の実現を果たすよう、努力します。」

(9頁からの続き)

本資料は、北京在住の風車職人である梁俊氏（1933年、北京東部の通州生まれ）の作品である。彼の家は祖父の代から風車制作を生業としてきたが、1970年代以降は異なる仕事で生計を立てていた。長期保存を可能にするため、本来は紙製である風輪の羽根を絹製にするなど多少の細工はあるが、大部分は昔ながらの技法で作られている。

2013年現在、この風車は当館1階中国・台湾コーナーに展示中である。入館者は息を吹きかけて風輪を回し、背後にある太鼓の音を聞いて頂けるので、ぜひお試しください。

(10頁からの続き)

法王の特別秘書が大司教に

今年1月6日、主の顕現節の日に、法王は4人の大司教を任命した。そのうちの一人が現法王の個人的秘書としての、ドイツ人ゲオルグ・ゲンスヴァイン (Georg Gaenswein) 神父だ。この日は特別ミサ（顕現節）の行われる日で、ヴァチカンに対する各国大使、外交官が参列している。その日に任命されることは意義も大きいし、喜びも一入だろう。神父はこの10年間法王の「陰」だったが、実質的には法王の右腕でもあり、法王の一番の協力者でもある。この10年間の親身ある挺身の姿が、法王から認められ、表彰されるというかたちになった。この任命によってゲンスヴァイン大司教は、ローマ法王の個人的秘書という立場と共に、法王庁の長官にもなった。元執事の裏切り行為やヴァチカンの銀行の不透明問題とその責任者の更迭問題、司教達の幼児ワイセツ事件等があったが、ゲンスヴァイン大司教はそれらの事件に巻き込まれることもなく、法王に忠誠を誓って来た。大司教のシンボル（紋章）も発表された。紋章の左半分は現法王の紋章を入れ、右半分はエルサレムの星を上置き、その下にドラゴン（忠節のシンボル）を配している。その儀式にはイタリアを代表して首相のモンティ氏が出席した。

クレジット・カードの使用禁止

ヴァチカンにも銀行がある。正式には銀行と言わないでIORという。IORは宗教活動協会の頭文字3つをとったものである。独立採算制で、民間人が長官となり、職員も一般人。ヴァチカンは国務長官を中心にして、委員会を構成し、そのIORの動向を見極め、IORの役員への任命権、罷免権を有している。ここ数年、IORのエットレ・ゴッティ・テデスキ長官の下、IORにダーティ・マネーが蓄積していた。2010年の時点で2,300万ユーロ（日本円で約25億円）が、ローマ検察庁によって差し押さえられた。ヴァチカンの銀行といえども、イタリア銀行からイタリア市中銀行同様の監視を受けている。IORの取引銀行のナンバーワンはドイツ銀行だ。昨年EUのマネーヴァル (Moneyval) の調査を受け、16人のメンバーのうち9人は問題なしの判定で安堵していたが、やはり不明朗な所が多かったのだ。そのために、イタリア銀行はヴァチカン内部での取引は全て現金で行うこととし、クレジット・カードでの支払いを禁止した。これはヴァチカン内にあるスーパーマーケットでの支払い、ヴァチカン博物館の入場券の購入も一切現金でなければならないと規定した。